



セルビア軍の攻撃の洗礼を受けた、ブコバルの宮殿の残骸。ここでは民族浄化の名のもと、教会から墓場まで完膚なきまでに破壊された。ザグレブの公舎のカルロパーツの破壊のは仕方、もっと徹底している。数年間虫さえいなかったとゆう。

ザグレブ放送局で、内戦について知りたい、という私に会ってくれたのは、資料局長のブベニクさんでした。カメラマンからはじめてもう四十年ザグレブ放送局で働いてきたとの自己紹介です。聞いていた私かなぜ制作局長でなくて資料局長なのかという顔をしたのでしょうか、す説明してくれました。自分の父親はドイツ人なので、完全にはクロアチア人の仲間には入れてもらえない。でも自分は資料の仕事は非常に重要で興味あるものと感じ、研究をつづけている。最近、情報技術の学位を取った、といて、分厚い学位論文を見せてくれました。さて題のビデオは、「クロアチアでの戦争」と題し、BBCが制作したものでしょう。早速みせてもらいました。

セルビアとの国境の町ブゴバルで九十日間抵抗した人たちが、降伏するときの映像です。みんな武器を外し、手を頭に当て、魚を並べたように地面に寝ます。するといっせいで射撃です。あとには、穴だらけの体ころがったのが映っています。誰がどうやって撮ったのか、わかりませんが、真実は必ず生きのびて、自らを伝えると思わせる映像です。

ブベニクさんはこのビデオの複製を部下に頼みましたが、二回失敗して、四時間かかりました。ブベニクさんは結局、私のために、半日付き合ってくれたのです。そして別れ際に、複製したビデオを差し上げるというのです。これは日本のNHKでは考えられないことです。

私がそれを言うと「著作権の問題があるし、原則はその通りだ。しかし原則だけでいったら組織は死んでしまう。責任をとるのもやるのが責任者だ。このビデオも無料で渡したことで、文句を言うやつがいるかもしれない。そのときは、私が払うつもりだ」でした。

この信じられない好意に感謝すると「私は、君が善い人だと直感したからそうしただけだ。私は情報の専門家だが、信頼データではない」でした。

おわりに

インターネットで、十分に情報を集め、もう旅行記が書けるような気が出かけたクロアチアですが、実際に人々の間を泳ぎ暮らした一カ月を記したこの旅行記は、はじめはまったく想像できなかった内容のものになりました。経済的には十倍も豊かな日本人に「人間的な暮らしの豊かさがあるのか」と、強く反省をせまられたのです。座ったままで「情報」を集めることの限界、さらにそれをもとに常識で推定することの危険を実感しました。本当のことをつかみたいなら、実際に飛びこんでみるしかないということでしょう。

でもどの国でも飛び込めば今回のような成果があるとは思いません。たとえばロンドン、ニューヨークなど、西側の大都会でこんな経験ができるとは誰も期待しないでしょう。クロアチアの人々の関心と好意は生活に追い立てられていないゆとりを帯びていますが、これは旧社会主義のよい置き土産でしょう。しかもクロアチアがセルビアなどどちがって、都会的であり、人々に対して開放的であるからでしょう。クロアチアは社会主義的であって、しかも都会的という点で特異なのかもしれません。

もう一つの大事な要素はこちらの接する態度です。彼らの心のリズムと同じゆとりをもっていなければ、そして目の光で好奇心と楽しさがあらわせないならば、すばやい心の交流はおこらないでしょう。グループでなく一人でいることも大事です。でもカップルでのクロアチア旅行を考えておられる方には、大学生をツアーコンパニオンに雇うことをお勧めします。この手配を、ザグレブのエスプラナーダホテルのアメリカ夫人

amelia.tomasevic@esplanade.tel.hr)と、ピラさん(pila-belami@usa.net)に頼んでありますので、どうぞ。

筆者は東京大学名誉教授 研究工房シンセシス主宰)